

日 時 2011年3月20日  
主日名 受難節第2主日  
場 所 品川教会主日礼拝  
テキスト ヨハネによる福音書 14：25～31  
説教題 「心を騒がせるな、おびえるな」

「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな、おびえるな。」

今日、主イエスがわたしたちに語ってくださる言葉です。主イエスは、今わたしたちにもっとも必要な言葉を語ってくださる。もっとも必要な言葉を、与えてくださるのです。「平和をあなたがたに残し」と主は言われます。この「平和」は「平安」とも訳せる言葉です。そのように訳している聖書も、少なくありません。ここでは、その訳の方が適当だと、わたしも思います。主イエスは、「平安をあなたがたに残す」、と言われます。「わたしの平安を与える」と言われます。主がそう言われるのは、わたしたちに平安がないからです。平安を失って、わたしたちの心が騒いでいるからです。心に恐れを抱いているからです。それは、まさしく、今のわたしたちの状況そのものです。いや、わたしたちだけではありません。日本全体が、心を騒がせている。脅えています。だから主イエスのこの言葉は、わたしたちだけのものではない。日本全体に対して、日本人のすべてに対して、主が語っておられる。「心を騒がせるな、脅えるな」。

日本を襲った地震と津波とは、わたしたちの想像を遙かに超える大きな爪痕を残して行きました。テレビの報道を見るたびに、わたしたちの心は、痛みと悲しみと、何とも言えない無力感で一杯になります。そして原子力発電所においては、今なお闘いが続いています。先週一週間、それらのことが、ずっとわたしたちの心を支配していました。何をしても、それが心にのしかかってくる。だから何をしても心が晴れません。平安になれない。

でも、こういう経験をして、わたしたちが改めてわからせられることが、あると思います。それは、わたしたちの平和な生活、平安な生活というものが、どんなに危うく、もろいものであるか、ということです。つい10日ほど前まで、わたしたちはこんなことは予想もしませんでした。皆それぞれに、小さな悩みや問題を抱えてはいましたが、それなりに平安な生活を送っていました。それが、突然起こった地震が、津波を引き起こし、発電所を破壊してしまった。それでわたしたちの生活は、一変してしまいました。地震は過去のことではありません。先週わたしたちは何回、地面が揺れ動くのを、体で感じたことでしょうか。何度も何度も、わたしたちの体は揺り動かされて、それがわたしたちの心にも、生活にも、揺さぶりをかけている。そしてそういうものに対して、わたしたちは本当に無力です。何もすることができない。逃げ出すか、耐えるかしかない。平安な時には、まるでそれが当たり前であるかのように、こういう生活がこれからもずっと続くかのように思っていました。それがどんなに大きな誤りであるかを、わたしたちは身にしみて感じさせられています。人間の力で、あらゆるものを自分の支配下において、思いのままにできるかのように思い込んでいた。原子力でも何でも、思いのままに操れると思っていたことが、どんなに大きな間違いだったかを、わたしたち全員が、

骨身にしみて教えられている。いつでしたか、わたしが直接聞いたことですが、ある牧師さんが、知人で原子力の専門家である方に、一体原子力というのは、安全なものでしょうか、と尋ねたことがあるそうです。そうしたらその専門家は、安全なものです、と答えた。でもそれに付け加えて、こう言ったというのです。「安全なものですが、それを扱う人が自信過剰であることが、気になります」と。恐らくその時点で、何でも自分の思い通りになると考えていると、大変なことになると、思っていたのではないかと思います。でもそれは、原子力に関わることだけではありません。わたしたちすべてのものが、平安を楽しみながら、まるで神さまなどいなくてもやっていけるように、思い込んでしまっていた。わたしたち信仰者でさえ、時にそういう思いの中に引きずり込まれてしまう、あるいは引きずり込まれたことがあった。それが事実だろうと思うのです。しかし、それが全く、崩れてしまいました。わたしたちは今、わたしたちの手ではどうにもならないことがあるのだということを、思い知らされています。

でも、だからこそ本当に幸いなことに、主イエスが立って、わたしたちに語ってくださるのです。「心を騒がせるな。おびえるな。わたしは、わたしの平安をあなたがたに与える」と、そう言われるのです。まるで、この国に住むわたしたち全員の心が総崩れになりそうな、そういう状況に、ただひとり立ち向かうようにして、主イエスが言われるのです。「心を騒がせるな。おびえるな。」

そのようにして平安をお与えくださる時に、主イエスが言われたことは「わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」ということです。この世がわたしたちに平安を与える、そういうやり方とは全く違うやり方で、あるいはそういうものとはまったく違うものとして、平安を与える、とおっしゃったのです。この世が、どのようにして平安を与えるか。このことについては、わたしたちもよく知っています。わたしたちは、この世で平安を得る。その方法の第一は、現実を見ないことです。今は、テレビをつければ、被災をした人たちの様子や、原子力発電所の様子を、報じていない時はありません。でもそういうものを見てみると、心がだんだん重くなってきます。わたしもそうなのですが、そういう時はテレビを消してしまう。見ないようにする。そうすると、ひと時静かになります。そのことから、離れられる。ちょうど、恐い出来事を見て、子供が怖がると、親が抱きしめて、大丈夫と言ってくれます。子供は親の胸の中に顔をうずめて、親の言葉を聴いて、慰めを得る。そういうことに似ているかも知れません。でも、それでは現実は何も変わらない。本当の平安は得られない。ですから、もうひとつの方法は、不安にさせるものを、取り除いてしまうことです。現実の問題を解決する。そうすれば、平安になります。これが一番確かな方法です。

でも、主イエスの平安はそういうものではない、というのです。現実を見ないようにして得られる平安ではない。心配事を取り除いて、初めて得られる平安でもない。心配事は、まだ厳然と存在している。それを、両方の目でしっかりと見ている。そういう状況で与えられる平安だ、というのです。心配なことがあって、それをちゃんと見ているのに、でも心には平安がある。そして、今なすべきことを、ちゃんと果たして行くことができる。逃げるのでも、隠れるのでもない。現実の中に、足を踏み入れていくことができる。そういう平安です。そういう平安を、主イエスは与えてくださる、というのです。

今回わたしたちが経験していることは、国家的な危機だと言われています。こういうことは1000年に一度あるかどうか、と言う人もいます。ですから、国が全力を挙げて、これに対処している。だからわたしたちの生活も、そのことに影響を受けざるを得ない。でも、そういう経験をしながら、思わされたことは、イスラエルというのは、こういう経験を何回もした人たちなのだ、ということです。いや、イスラエルは、これ以上の苦難を、たびたび、神の民として経験してきたということです。わたしたちは、国家的な危機と言っても、国が滅んでなくなってしまうわけではない。わたしたちも、基本的な部分では、普段通りの生活が続けられています。でも、イスラエルが経験したことは、そんなものではない。自分よりもはるかに大きな国に攻められて、攻め落とされて、国が滅亡する。大勢の人が殺され、連れ去られて、国に人がいなくなってしまう。そういう経験をしたのです。

今年度一年間、わたしたちは聖書に聴く会で詩編を読んで来ました。わたしも、そこで取り上げられたひとつひとつの詩編を読みながら、改めて、詩編には、嘆きの歌と、讚美の歌がある、という事実を、再認識させられた思いがしています。嘆きと讚美、悲しみの歌と、喜びの歌。イスラエルの信仰生活は、まさにそのようなものだった。身を切られるような悲しみの中で、しかし、イスラエルを支えたものは、神さまに祈ることです。祈りを聴いてくださり、受け止めてくださる神さまがおられることです。自分たちが味わっている苦しみが、神さまの裁きであると思っても、彼らはその神さまに祈ることをやめない。自分たちの嘆きを、悲しみを、必ず神さまが受け止めてくださると信じている。あの詩編の嘆きの歌の中に、イスラエルを支えたものが現れていると、わたしは思う。

このヨハネによる福音書が書いている、その出来事においてもそうです。ここで主イエスが「心を騒がせるな。おびえるな」と語ってくださっているのは、弟子たちに向かっています。主イエスを殺そうという動きが、ユダヤ人たちの中でますますはっきりしていく状況で、わずか11名の弟子たちが、ユダヤ人全体を敵にまわさなければならないようなことになる。周囲の人々全部が彼らの敵になる。そういう状況で、心が騒がない筈がないのです。脅えないでいられる筈がない。あるいは、そのことは、この福音書を書いたヨハネが生きていた状況においても、変わらない。この福音書が書かれた時代は、生まれたばかりの教会が、迫害の危機に直面していた時だと言われています。この時の弟子たちと同じように、ユダヤ人社会全体が敵になってしまっている。主イエスを信じる者は、ユダヤ人社会から追放すると宣言されている。そういう状況です。そういう状況で、教会の中にいる者たちの心が騒がない筈がない。脅えを感じない筈がないのです。しかし、そういう者たちに対して、主イエスは「心を騒がせるな」と言われた。「脅えるな」と言われたのです。このことは、弟子たちが聞いた言葉です。しかしその言葉を、迫害の危機に直面していた教会も聞いたのです。自分たちに、主イエスが語ってくださっている言葉として聞いたのです。だからこれを、福音書に書き記した。

先ほど、主イエスが平安を与えてくださる、という時に、それは、この世が平安を与えるというのと、違うやり方で与えてくださるのだ、という話をしました。この世においては、不安の材料を見ないようにするか、あるいはそれを取り除くか、そういう方法で平安を与える。でも、主イエスが与える平安は違っている。この方が与える平安は、

不安のただ中で与えられる。わたしたちを不安にする材料は依然として残っている、そういう中で、しかしこの方の平安は、確かにわたしたちに与えられる。そういう話をしました。いったい主イエスは、どのようにして、平安を与えてくださるのか。そのことについて、主イエスが言われたことは、こういうことです。「『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻ってくる』と言ったのをあなたがたは聞いた。」わたしたちに平安を与えてくださる、その根拠は、ご自分の言葉の中にある。それは「わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻ってくる」という言葉です。ご自分は捕らえられて、十字架にかけられて、殺される。しかし、必ずあなたがたのところへ戻ってくる。これが、あなたがたが与えられる平安の根拠だと主は言われた。この言葉は、一旦は弟子たちを離れられた主が、必ずまた戻って来られる、ということですが、でもそれ以上の内容を含んでいる言葉です。単に、一度離れて、また戻るというだけのことではないのです。

この箇所で説教をしているある牧師さんが、こういうことを言っています。ここで主イエスは、弟子たちを離れて行かれるが、でも、また彼らのところへ戻って来られると、言っておられる。でもこのことは、離れて行かれた主イエスが、たまたま戻って来られるとか、そういうこともあるかも知れないという意味ではない。離れていく、ということと、戻ってくるということは、切り離せない。主イエスは、離れて行った以上は、必ず戻って来られる。いや、主は戻って来るために、離れて行かれるのだ。何故なら、それが神さまの救いの業だから。神さまがそのようにして、わたしたちを、この世界を救ってくださる。そのために起こされる出来事だから、必ずそうなるのだ、とそう言っているのです。なるほどと思います。それは、言葉を換えて言うと、十字架と復活とは、切り離せない、ということです。

今、わたしたちはレントの時を過ごしています。主イエスが、わたしたちを罪から解放するために、十字架の苦しみを負ってくださったことを思いながら、この時を過ごします。主イエスがわたしたちの罪を負ってくださったのですから、当然のことながら、自分の罪を思うのです。罪のことなどすっかり忘れて過ごす、というわけにはいきません。しかし、それならこの時期を、罪を嘆きながら過ごすのか、ということ、そうではありません。ある人がこういうことを言っています。「わたしたちは、まるでイースターがなかったかのようにレントを過ごすわけにはいかない」と。その通りです。十字架で死んでくださった主イエスは、復活をされた。死に打ち勝ち、わたしたちの罪に打ち勝って、復活をされた。ですから、わたしたちの罪は、すでに克服されている。ひとりひとりの中に、まだ罪が残っているかも知れないが、しかしそれは必ず完全に消え去る。それを忘れるわけにはいきません。そして主イエスが復活をされたのは、たまたまそういう出来事が起こった、というのではなくて、主イエスが十字架で死なれた以上、必ずそうなることになっていたのです。神さまという方は、十字架で死ぬところまで従順にご自分に従われた方を、そのまま見捨てておかれるような方ではないのです。だから主イエスが、十字架で死なれた以上、必ず神さまが復活させてくださる。

大切なことは、この全ての出来事を通して、神さまが行動しておられるということです。確かに人間の罪が、主イエスを十字架につけるのです。ユダヤ人の指導者たちが、計略を巡らして、主イエスを捕らえ、弟子たちの弱さがそれを赦し、そして群衆たちが

指導者たちの後押しをするのです。そうやって、人間の罪が主イエスを殺すのです。でも、神さまがそこでなされたことは、そうやって人間の罪が主イエスを殺す、その出来事を用いて、その人間の罪を、すべて明るみに引きずり出してしまわれたことです。指導者たちの罪も、弟子たちの罪も、群衆の罪も、ローマ総督の罪も、みんな引きずり出してしまわれた。罪とはこういうものだということを、明らかにしてしまわれた。そしてそれらのすべての罪に対する裁きを、十字架の上で、主イエスに受けさせられた。そのようにして、わたしたちがひとりも滅びないで、永遠の命に生きることが、神さまの願いであることを、明らかにしてくださった。この神さまの御心を喜び、自分のために死んでくださった主イエスを、わたしの主として受け入れる者は、すべて罪から解放される。その人にはもう、神さまに対する恐れはないからです。ただ神さまに対する感謝のみがあるからです。神さまを憎んだり、神さまに対して後ろめたい思いをもっているところに、罪が育つのです。でも神さまに感謝している者の中には、罪が育つ余地がない。そうやって神さまは、主イエスによって、罪を滅ぼしてしまわれたのです。それが主イエスの十字架と復活の出来事です。今わたしたちは、その出来事を心に刻みながら、この時を過ごしている。

だからここで主イエスは、弟子たちに向かって「あなたがたがわたしを愛しているなら、わたしが父のもとへ行くことを喜んでくれるはずだ」といわれるのです。弟子たちにとっては意外な言葉であったと思います。彼らにしてみれば、主イエスを愛しているから、その主イエスが離れて行かれることを悲しむのです。愛しているから、その主イエスが死んでしまわれると思うと、心が騒ぐのです。でも主イエスはそうは言われない。「喜んでくれるはずだ」と言う。「なぜ喜ばないのか」と言うのです。すべてが神さまのご計画のうちにあるからです。神さまがここで、行動しておられるからです。それが見えたら、喜べるはずだというのです。

この時主イエスは「わたしは去って行くが、また、あなたがたのところに戻ってくる」という言葉を、繰り返されました。去って行くが、戻ってくる。これは弟子たちにとっては、十字架で死なれた主イエスが、復活して弟子たちに姿を見せてくださる、ということです。でもそれだけではありません。この言葉は、もっと先のことを言っています。復活をなさった主イエスは、40日目に、天にお帰りになりました。もはや弟子たちの目からも、見えない存在になられた。しかしそれから10日後、ペンテコステの時に、神さまのもとから、聖霊が来てくださった。そしてそれからずっと、この聖霊が、わたしたちの中に留まり、働き続けていてくださる。今は、聖霊が働いてくださっている時代です。そしてわたしたちは、その聖霊のお働きの中で、生かされているのです。

この聖霊について、主イエスはこう言っておられます。「しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことを、ことごとく思い起こさせてくださる。」主イエスの言葉を、思い起こさせてくださる。それが聖霊のお働きだ、と言われるのです。思い起こす、というのは、単に忘れていたことを思い出す、という意味ではありません。主イエスが語られたことを、今、このわたしに語られていることとして、新しく聞かせてくださる、ということです。聖霊のお働きによって、主イエスが、今、このわたしのために生きていく方となってくださる。このことは、国を超え、時代を超えて出来事になる。だから今

は、世界中の者たちが、主イエスにお会いすることができるのです。主イエスのお言葉を聴くことができる。今ここで起こっていることもそうです。わたしたちは、聖書を通して、主イエスの言葉を聞いています。でもその主イエスの言葉は、昔々の言葉ではない。今主イエスが、わたしたちに語っておられる言葉です。わたしたちは、その主イエスの言葉を聞いている。今それは、聖霊のお働きです。聖霊において、主イエスは今ここで生きておられる方になっている。

先週何回か、メールで教会員の皆さんに短いメッセージと祈りの言葉を送りました。そういうことが必要だと思ってしたのですが、皆さんにお読みいただけるように、」今日はそれを印刷して配布しました。わたしの言葉もありますし、説教塾の仲間の言葉を紹介したものもあります。いろんな方から、励ましを受けていますという応答があって、感謝しておりますが、その中の言葉をお読みいただいてもわかると思います。一貫して言われていることは、今わたしたちが経験していることは、神さまと無関係ではない、ということです。すべてが神さまの眼差しの中で起こっているということです。神さまはこういうことと、無関係でおられる方ではない。悲しみのあるところには、十字架が立っている。わたしたちが苦しみを味わっているところでは、主もまたそれを苦しみとしてください。わたしたちは、みなしごのように、道ばたに放り出されて、ひとりで悲しんでいるのではない。ひとりで苦しんでいるのではない。そこでこそ、神さまが共にいてください。一貫して語られているのは、そのことです。そのことが、慰めなのです。

しかし、神さまのなさることは、単にわたしたちの側にいて慰めてくださることに、留まりません。神さまの取り組みは、もっと深いところでなされています。そのあらゆる苦しみの根っこにあるもの、あらゆる問題の根源にあるものと、神さまは取り組んでいてください。罪と取り組んでいてください。罪こそ、あらゆる問題の根っこにあるものです。それが世界をおかしくしている。そこから世界を解放するために、神さまは全能のお力を傾けてくださっている。そのために主イエスは十字架についてくださり、そのために聖霊が来てくださったのです。だから神さまは、一番深いところで、わたしたちの問題を捕らえ、闘っていてくださるのです。

だから主は最後にこうおっしゃった。「わたしが父を愛し、父がお命じになったとおりに行っていることを、世は知るべきである。さあ、立て、ここから出かけよう。」すべてのことが、神さまのご計画の中にあること、神さまが行動しておられるということ、世は知るべきなのだ、というのです。でもそれを知るべきなのは、この世だけではない。わたしたちもそうです。この世の中で、神さまが救いの業を推進しておられることを、わたしたちも知るべきなのです。心を騒がせないために、おびえないためにです。

「さあ、立て。ここから出かけよう」と主は言われます。この世の力が待っているところへ、出て行こう、というのです。わたしたちもこの礼拝を終えて、自分の生活へ帰って行きます。負うべき重荷が待っている生活です。心が重くなるようなニュースが待っている生活です。でも、「出かけよう」というのです。あなたたちだけが行きなさい、と言うのではないのです。わたしも一緒に行く、というのです。この一週間、わたしたちがどのような経験をしよう、どのような思いを味わおうと、どのような働きをしよう、それはわたしと一緒になのだ、と主イエスは言われるのです。だからわたしたちは、心を騒がせないでいることができる。おびえないでいることができます。その幸いの中

で、主イエスを見上げながら、この一週間を歩み通したいと願う。お祈りをいたします。